きゅうり

中根恵美

一

シャリガリ、シャリガリ。きゅうりを口に入れたら、奇妙な味が広がった。甘い。母を見遣って私は思う。塩と砂糖でも間違えたのだろうか。

「はぁ」

溜め息は食卓の誰にも届かなかった。ただ父がズズーズッと味噌汁を啜る音だけがする。母はぼうっと箸を止めたまま動かない。父も母もなんでこんな感じなのだろう。

箸を置き、皿を持って立ち上がる。ゴミ箱の前まで来ると、茶碗をひっくり返して真っ白なご飯を落とした。中途半端に食べた焼き鮭の残骸も、同様に。皿は流しに置いてそのまま。重い空気から逃れるために、できるだけ足早にダイニングから去る。

自室に戻ってベットに倒れ込んだ。明かりを点けるのさえ面倒で、暗い中で目が慣れるのを待つ。ポケットからスマートフォンを取り出して、夕食の間に届いていたメールを開いた。「さっきの写真ちょーキレイじゃん！　明日そこ連れてってよ～　ダメ？」とかいう友達からの中身の薄いメールも、この時間帯だけは救いだ。

昔から、つまらない食卓だった。

淡々としていて誰も喋らない。流石に幼い頃の私は口を開いていた。あの両親相手に、よくあんな喋りかけていたとあの頃の自分を今では尊敬している。別に話を完全に聞いてくれないわけでもない。でもあんな適当な返事しか返さない相手に飽きるのに時間はかからなかった。母も父も自分の事しか考えていない。

父と話すのは必要な時だけ。母とは父よりも話すけど、向こうはいつも適当で上の空のまま。それでも別にいいんだ。基本困らないから。

だけど夕食を食べる時だけ全員が揃う。食器の音か食べる音か。二つしか鳴り響かない世界は白にもなれず黒にもなり切れないセピアで止まったまま動かない。もう一生色なんてつかないんだろう。

だから必要以上にカラフルな白を持つ電子の世界を覗くんだ。くだらないメールの遣り取りを繰り返す。

「ありがとぉー　明日は無理だからまた今度ね～」明るく言っているように見せかけて、今の私の顔は仏頂面だ。ああもう。縫いぐるみに蹴りを入れる。それでも苛立ちは収まるどころか膨れ上がっていった。

「めんどくさ……」

呟いた言葉は自身の耳にさえ届かずに消えていった。と、突然着信音が鳴り響く。

「ん？」

先程のメールの返信だろうか。名前だけ確認して、内容を見るのを止める。なんでこんな時に父からのメールなんか見なきゃいけないんだ。

スマートフォンはチカチカといくらか光を放った後暗くなって、部屋は暗闇に舞い戻った。

いっそこのまま寝てしまおうか。部屋着を着てるし、寝られないこともない。ゆっくりと目を閉じる。目の裏に浮かんだのは食卓の風景。歯ぎしりをした。最早さっきのなのかも分からない。毎日毎日変わらなさすぎて。家族の団欒なんて何処にもない。無言の世界。凝り固まった世界。開くことなどない世界。反吐が出る。気持ち悪い。ああもう眠れ！　きつくきつく瞼を閉じる。

それを妨げたのはドアが開く音と、顔に当たる光の線だった。
「ちょっと、美奈?」
うるさいうるさい。今度は何で母が。苛つきを収める暇さえない。スイッチを押されて電球が光る。眩しくて目を開けるのが辛かった。
「何か用?」
仕方なしに起き上がって母を睨み付ける。
「明後日の夜ね、私出かけるから、お父さんと二人で晩ご飯宜しくね。美奈が作ってあげるのよ」
なんてこった。母のあの微妙な御飯を食べないで済むのはいいけど、父の分まで……面倒だ。友達誘って外食でもしてしまおうか。母の顔色を伺う。
「頼んだわよ」
「……はーいはい」
取り敢えず今は適当に返事を返しておこう。不満を漏らしても、面倒な事を言われるだけだから。
「それから、明日はお父さんが出かけるから二人きりね。何を作ろうかしら。」
「げ。」

それこそなんてこった。どっちも最悪だ。明日は母と二人きり。明後日は父と二人きり。
かと言って三人でいるのも十分最悪だけど。同時に出かけてくれればいいのに。
「あら、メール来てなかった?」
不思議そうに首を傾げる。
「来ててもそんなのすぐに見る訳ないじゃん」
納得できないという思いが透けて見えたけれど、無視してスマートフォンに腕を伸ばした。確かに父からのメールにはそのようなことが書いてあった。加えて

用事があるから早めに来いだとか。誰が行くか。
「お風呂入ってくる」
脇を通り過ぎて部屋の外に出て行く。
「……どうぞ」
母の小さな声が遠く聞こえた。

二

靴を半端に履いた状態で私は振り返った。
「は？」

父から差し出されたものを思わず受け取る。それは酷く重かった。父曰く「イチガンレフノデジタルカメラ」というらしい。こんなものなんで持ってるんだか。
「持っていったらどうだ？」
父は表情の読めない顔で座った私を見下ろしている。
「別に、いらないんだけ。」
正直な感想だった。私は昨日のメールの子と結局遊ぶことになって出かけるんだよ？　そこで何故こんなゴツイカメラを持っていかなきゃいけないのか皆目見当も付かない。

「いい写真が撮れるぞ」
「……それが？」
そりゃそうでしょうよ。ここまで大きくて重いのにまともな写真が撮れないならやってられないじゃない。父の真意はいつも読めない。一体何を考えているんだろうか。
「だって出かけるんだろう？」
「それはそうだけどさ……」
本当にこの父は何も理解していない。せめて、折角可愛く揃えた服装とこんなカメラが合わないのくらい

は分かんないかな。
「世界が撮れるぞ」
唇がいびつに歪んでしまった。苦笑いしかできない。なんだ。私の父はまさかの電波中年だったのか。絶句して何も話せない。
「持って行け」
父はそれだけ告げて私にカメラを押しつけた。
結局、強引な父に押し負けた私はカメラを首から提げた状態で彼女に会っていた。
「なにそれ～！　どうしてカメラなんて持ってんの？」
朝の駅前で彼女の声は酷く目立った。少しだけ視線を感じる。
「なんか父に無理矢理持たされた」
溜め息と共に肩を竦める。
「あの例のマイペースな！　うわあ、乙～」
「で、今日マジで行くの？」
あんなスマートフォンで撮った写真のところに行きたいとか……ただのノリじゃなかったの？
「行くよ！　行く行く！　折角だから旅行気分で写真も色々撮ってよ～。今いいもん持ってるんだからさ！」
半ば彼女に引きずられるようにして私は改札を通り抜けた。
電車に乗って早々、いちゃついてるカップルが目に付いた。
「ウザったいなあ」
適当にシャッターを切った。
「ははっ、撮る基準がウザいって美奈らしっ」
一瞥したら、彼女はお腹を抱えて笑っていた。そんなに可笑しいか。爆笑する彼女の顔も一応写真に収め

ておいた。
窓から見えるものも撮ってみる。つまらない建物ばっかりだけど。
「……でさ～。美奈？」
「ん？　どうかした？」
「だ～か～ら～、この前の～……」
ふと彼女の顔に影ができた。声が遠ざかる。外を見ると、太陽が雲に隠れて消えていた。
再び直接太陽を浴びた時には、日はだいぶ高くなっていた。

「な～んだ、そんな遠くないとこじゃん」
彼女が意外そうに口にする。
「だって学校帰りに寄ったところだから」
「そーなの？」
「……そーだよ」
メールにも書いたじゃん。まともに読んでもないのか。溜め息を吐いて、空を見上げた。呑気に雲が浮かんでいる。カメラを持ち上げて、そっとレンズを覗き込んだ。
他にも割れたコンクリート。見慣れた人混み。親の手を引く子供。何度も適当にボタンを押した。
理由があって選んだ訳じゃない。彼女の言葉を借りるなら、ウザかったものとでも言うか。気に障ったものが消えるように願って何枚も枠に収める。まともにレンズを覗いていない時もあった。ぶれているとかぶれていないとかはこの際気にしない。ただただボタンを押すだけの作業だ。
「なんか美奈ってさー写真撮ってる時、結構真剣な顔するんだね～」
「は？」

唐突な彼女の言葉に変な声が出た。撮ろうとしていた建物から彼女に視線を移す。真剣な顔？　私が？
「なんていうか～、そうだな。楽しそうって感じ」
私には、にへらって笑った彼女の方がとても楽しそうに見えた。
「……お昼でも食べに行こう」
何処かで後ろ髪を引かれつつ、私はその場を去っていった。
いつの間にか、あたりの風景が茜色に染まっていた。
「ちょっと～こんな時間になっちゃったけどいいの～美奈？」
「だってこの前と同じじゃつまんないし」
「まあそりゃそっか。わーい新しい美奈の写真楽しみ～！」
彼女はいつもテンションが高いな。ウザいを通り越して、もうなんか清々しいよ。
「あ、ここ？　ここじゃん！　撮って撮って～！」
つられて頬が緩むのを感じた。
本当に何もない場所。背後に海があるわけでも、広い空があるわけでもない。あの時は買い物帰りに気まぐれに撮っただけのくだらない写真だった。でも、彼女が入れば少しはいい写真になるかな。
カメラが無機質にカシャンと音を立てた。
母が珍しく私に声を掛けてきたのはその晩だった。
「あら、それお父さんのじゃない」
「……そーだけど？」
カメラを机に置きながら答える。
父のだからなんだっていうんだ。ああ、肩痛い。
「何かいい写真撮れたの？」
「……な訳ないじゃん。」

あれらは、きっといい写真とは呼ばない。あんな適当な写真なんか。
「あら、でも素敵じゃない」
「ちょっと！　勝手に見ないでよ」
許可も取らずに眺め出した母からカメラを奪い取る。
「そんなに乱暴にすると壊れちゃうわよ」
「知るか」
だとしても無理矢理渡してきた向こうだし。それにこれくらいじゃ壊れないよ。
「その綺麗な写真、お父さんに見せてあげなさいよ」

「なんで」
「なんでって、美しい世界だったじゃない」
幸せそうに笑う母が誰かと重なって見えて、私は目を背けた。
「そんなことないでしょ」
「えー自分でも確認したの？　ほら」
手を伸ばそうとする母から逃げ出す。
「どーでもいい！」
捨て台詞のように叫んで、部屋に飛び込んだ。
全くなんて面倒な母だ。こういう時だけ絡んでくるなんて。
カメラを抱えたままベットに転がる。
そこでふと、何となしにだ。母の言葉とは関係なく、本当に何となくだ。今まで撮った写真を眺めてみた。機能がよく分からなくて、どこで見られるかを探すのも一苦労だった。適当なボタンを押していたら、急に画面に写真が現れた。つまらない写真ばっかり。適当に撮ったから仕方ないか。
でも私の視線は画面から離れなかった。未熟。綺麗。失敗。躍動。未練。静止。追憶。後悔。幾つもの二

字熟語達が頭に浮かんでは消えていく。
思いが重いに。映像が影像に。尚早に焦燥。
……液晶を叩き割りたくなる衝動を抑えるのに、時間を有した。
「ほら～、晩ご飯よ！」
食卓へ向かわされる言葉に救われる日が来るなんてね。
「はいはい！」
私は母を手伝うため、えいしょっと立ち上がった。

三

目を覚ましたのはちょうど昼頃だった。母はもう出かけたらしい。父も仕事に出たのだろうか。家にはいなかった。食卓で一人食パンを囓る。なんて優雅な始まりだ。今夜の事を考えなければ。父と二人か。無言でつまらない食卓になることは必然だよね。
あ、そういえばカメラ返してないや。まあ後で食卓にでも置いておけば大丈夫か。手を叩いてパンくずを落としてから、皿を持って立ち上がった。
写真をパソコンに取り込むのってどうやればいいんだっけ。ＳＤカードとかにデータが入ってるんだったかな。カメラなんて使わないから分かんないや。まあ後で検索すればいいか。
皿を水に浸し、手も歯も洗ったところで部屋に戻った。
カメラを弄って取り敢えずＳＤカードらしき物を取り出す。この中に多分写真が入っている筈。四苦八苦

しながらなんとかデータをパソコンに、パソコンからスマートフォンに移す。多分これで大丈夫かな。
「あー疲れた」
腕を伸ばして伸びをする。慣れない作業はやっぱり時間を食うな。
確認のため、もう一度スマートフォンで写真を開く。今一、今一、今一。消しちゃていいよね。パソコンにまだデータ残ってるし。
じゃあカメラ、食卓に置いておこうか。私はカメラを抱えてゆっくりと椅子から立ち上がった。

菜箸で麺をもう一度ぐるりと掻き回す。このくらいでちょうどいいかな。
「もう晩ご飯できるよ」
のんびりとテレビドラマを見ている父に声を掛ける。
「おお……」
これは絶対聞いてないな。確かに今いいシーンっぽいけどさ。人の話聞けこの野郎。
「麺伸びるけどいいの！」
少し声を荒げて言った。するとぴたりと止まって、そそくさとテレビを消して姿勢を正した。手伝う気はちっともないらしい。父なんてそんなもんか。
湯気が熱い。慎重に麺を取り分けて、上に具材を乗せる。これでいいかな。出来上がり具合を見詰めて許可を出す。こぼさない様に気を付けながら食卓まで運んだ。
「味噌ラーメンか……」
「何、塩がよかった？」
自分の分を取りに戻りながら返す。一応塩は置いてあったよな。他に豚骨とかもあったっけ。醤油はなかったような気がする。

「いや、久々だと思ったんだ」
確かにそうかもしれない。そもそもラーメン自体余り作らないからな母は。私は面倒だから冷凍食品とかラーメンみたいに湯にぶち込むだけのやつとか使っちゃうんだけどね。母は無駄に手作りしようとするから。ただのレトルトとかいっそスーパーの総菜で構わないのに。昨日の母との食事を思い出す。食卓に並んだ私の好物。そういうところだけは把握してるあたりがウザったい。無理に家庭の味とか出そうとするから残念な事になるんだよ。失敗してこの前のきゅうりみたいに変な方向に手抜きなものができあがったりさ。
「こういうのはあまりよくないが、母さんの料理はそこまでじゃないからな」
なんだ同じこと思ってたんだ。伊達に毎晩同じ食事を食べてるわけじゃないか。
「この前なんかきゅうりが甘かったし」
「あー、あれは酷かったな」
私と父は同時にずるりっと麺を啜り上げた。
「……せめてさ、しょっぱすぎる方がいいよね」
ちらりと父に目線を遣って言う。だか目の前の父を見ると淡々とラーメンを啜っていた。またいつもの考え事か。やっぱり仕事の事しか考えてない。いや、実際何考えてるかまでは分からないんだけれど。
「美奈」
「え、どうかした？」
ラーメン見詰めながら言わないでよ。私はラーメンじゃないってば。
「写真見たぞ」
そういえばカメラの方のデータ、消してなかったっけ。

「……それが？」
箸は止めない。伸びちゃうじゃん。あ、美味しい。
「やっぱり綺麗な世界だっただろう？」
ちらりと視線を上げると真剣な瞳とかち合う。
「カメラってのはただの切り取られた世界だからな。いつもとは違うだろ？」
「だとしたら何だってのよ」
早く食べてよ。後片付けだってしなきゃいけないんだから。
「写真を通して気付かないか？　世界がこんなにも綺麗な事に」
電波め。と呟いた声は父には届かなかったらしい。無視したとでも思われたみたいだ。少しだけ寂しそうな顔した。私は箸を置いて、無言でどんぶりを煽る。
ラーメン食べ終わったら、彼女……千夏にメールでも送ろうかな。昨日撮った写真を付けて。

四

スマートフォンをいじりつつ、のんびりとベットで寛いでいる時の事だった。
「うわあ！」
思わずスマートフォンを取り落としそうになった。バイブにしてたの忘れてた。画面に現れた表示を見ると千夏からだった。いくつか操作をしてメールを開く。
「写真ありがと～！　でも私が映ってない風景のもほしいよ～」
でもあの写真が一番よく撮れたと思ったんだけど。
しょうがないから昨日取り込んだ写真のデータをいくつか添付して送る。でもこれ以上は送れそうにない。

適当に撮ったせいもあって、手ぶれしているのも多いから迂闊に送れやしないんだ。
自然と、机の上のカメラが目に入る。
これをくれるって本当なんだろうか。父の発言を思い出す。
「ほら！　だからカメラ返すって言ってんじゃん」
昨晩、夕食の後に声を掛けた。
「いや、それもうお前のだぞ？」
は？　え、くれるって事？　脳の処理が追いつかなかった。

「好きに使え～」
「ちょっと！」
慌てて立ち上がったけれど、父は振り返りもせずに部屋に消えていった。本当に自由過ぎる。
カメラは今現在も物々しく机のスペースを埋めていた。これをまた使う時が来るんだろうか。物思いにふけっていると、また手の中でスマートフォンが震えた。さっきの返信かな。
メールを見た後、いつも通り返信しようとして、一瞬手を止めた。けれどすぐに画面を切り替える。

「うお⁉　どうしたの～。メールじゃなくて電話なんて珍しいじゃん！」
驚きと嬉しさの混じった声で千夏が言う。
「ん～、何となく」
「あっそ～！　あ、写真ありがとね～！　嬉しかったよ、美奈」
感情がはっきりと口調に表れる彼女の声を聞くのは好きだ。
「ありがと、千夏」
「……へぇ。本当になんかあったんじゃないの？

あたしの名前なんか呼ぶの久々じゃん」
「そうだっけ？」
とぼけて返す。確かに言ってなかったけど。
「そうだよ～！」
「じゃあ多分、千夏の馬鹿がまた移っただけだよ」
「馬鹿って何よ～もう、可愛くないな～」
そう、ただまた移されただけだ。千夏は馬鹿だから。
そして私も馬鹿だから感化されちゃったんだ、きっと。
「あ、そうそう！　話変わっちゃうけどさ」

「何、どうかしたの？」
「あの気まずいと噂の食卓なんだけど！」
自分でも眉をひそめてしまうのを止められなかった。折角の楽しい気分が一瞬で削がれる。
「……」
「いや、ね。美奈が不機嫌になるのも当然なんだけど、取り敢えず聞いて！　えっとね……」
元気が売りの彼女も遠慮したように声のトーンを落として話し始めた。
「……ね、こんなのはどう？」

千夏の案は何というか、楽観的な彼女らしかった。
「嫌だ。」
「だ、騙されたと思って！　このままずっと気まずいままじゃそれこそめんどいし、嫌じゃん！」
彼女の言うことも一理ある。でもなあ。
「お母さんのまずいきゅうりをまた食べるよりはいいでしょ！」
「……じゃあ、試しにね」
「よっしゃー！　結果報告楽しみにしてる！」
千夏はただそれが聞きたいだけでしょ。実際私がど

うなるかなんて考えてもいないんだから。あー、だるいなあ。そう思いつつも少しだけわくわくしてしまったのは、やっぱり千夏の馬鹿が移ったからなんだろう。
スイッチを長押しして火をしっかりと点ける。
「美奈！　そんな事しなくていいって言ってるでしょ？　ほらほら、席にでも着いてて！」
きゅうりを切っていた母が苛立ちを募らせている。
「別にいいでしょ。さっさとやるよ。」
フライパンを放置して、冷凍庫を漁ってみた。えーと、何にしよう。

「あー！　だから冷凍食品とか使っちゃ駄目でしょ！」
「冷凍でいいじゃん。どうせ料理上手くないくせに」
適当に物色しながら返す。
「そ、そういうこと言わないで。私だって頑張ってるんだから」
不機嫌そうな声が背中にかかる。
「分かってるから言ってんの。無理するより少しずつ普通に美味しいの作ってよ。そっちのが嬉しいもん」
「例え冷凍でも？」

不意に包丁の音が止まった。
「冷凍でも。手が込んでるくせに美味しくないとか嫌だし。……はーい。餃子焼きまーす！」
油をさっと引いて、餃子を手早く並べる。
「美奈！」
感情を露わにした母は、やっぱりどこか千夏と似ていた。
やっと餃子に口を付けた母に向かって言う。
「ほら、美味しいじゃん」
さっきから中々手を付けないんだから。私と父はも

う食べ終わるってのに。
「……それはそうだけどね」
箸を口に運ぶ母は未だどこかで不満そうだったけれど、少しは伝わったみたいだからよかった。まあでもまた難しい料理とかに挑戦しちゃうんだろうけど。
それはそれか。何となしに息を吐いて、よそを向いた。
そして目に入ったものに驚いて動きを止めた。
「何、あれ？」
嫌悪感が混ざってしまったのは仕方のないことだろう。
「……」
誰も何も答えない。ちょっと人の話を聞け。
「ねぇ」
なんで私が一昨日撮った写真が額縁なんかに飾られているんだ。父と母どっちの仕業だ。
「なんで、あの写真がここにあるの？」
やっと気付いたのか母が私を見詰めた。
「え？　美奈がやったんじゃなかったの。じゃあお父さんじゃない？」
父を見遣るけれど、いつものように味噌汁をズズーズッと啜っている。相変わらず真意の読めない父だ。
「……」
ウザい家族。自分の事しか考えてないと見せかけて、みんな人の事を考えてるんじゃん。私だったって事でしょ、自分の事しか考えていなかったのは。
「どうかしたの、美奈？」
反応のない私に、母が不思議そうに声をかける。
「……何でもないし」
なんて、気まずい食卓だろう。口に入れたきゅうりは酷くしょっぱかった。